

シリーズ隠れた建築紹介 ～港町新潟のかけら～

町の雰囲気は、個々の建物や植栽等でつくられている。そんな中で、普段見かけることのない古い洋館や洋風な建物が見慣れないだけに、どこやあやしげで何かいわれやこだわりがあるような感じがし、町中でそこだけ違う空気が流れているようである。区画整理がされ、きれいに並べられた町はどこか白々しく感じてしまうが、これは個々の家の空気の濃さが同じであるためであろう。

そんな空気の淡い町が増えていく中、新潟市に明治期を偲ばせる建物が点在している西大畑町というところがある。ここは、現在、都市化の波によって新潟の発祥の地という歴史の面影を失いつつある新潟島の中で、商都新潟の名残を感じることのできる数少ない場所の一つである。



海へぬける階段脇の洋館

一歩この町の中にはいると、違う世界にきたような、それでいてどこか懐かしさを感じる。このような感覚を持つのは、自分の住んでいるところ、

または生まれた場所の濃さをこの町のどこかで見つけることができ、それが郷愁や憧憬を誘うからではないだろうか。つまり、西大畑は洋風な建物の濃さが映える、濃淡のある町なのである。

西大畑にある洋風な建物は、和洋折衷の建物がほとんどであるが、それがまたここにしかない独特な雰囲気をつくっている。今なら、洋風な建物は、外国からそのまま輸入したり、それを模したものが多く建てられている。しかし、和と洋、過去と今がうまく融合しているものはないであろう。

また、ここは砂丘上に位置しているため、細かくくねくねと曲がった道や坂や階段が多く、視点の変化に富んでいる。細かい道は親近感を与え、階段は人が歩いてしか上がれない歩行者だけの空間という安心感があり、道ばたで立ち話をしたり、猫が悠々と道の真ん中を通り過ぎていくことができ、それが町の雰囲気となっている。また、坂や階段というのは不思議とその向こうに何かあるのではないかと期待を持つものである。その期待誘われるように歩いていくと、要所要所に洋風の建物が見え、それに引き寄せられるように進んでいくと、いつのまにか海に出してしまう。今までの細い道に反比例するかのような海の広さには、通ってきた町がここに誘い出すための楽しいアプローチであったかのように感じてしまう。

このように、西大畑の街並は新潟の過去の生活や文化を垣間みることができる町である。

—(株)アーバンプランニング 泉 美佳

北陸支部インフォメーション

■北陸支部設立50周年記念事業を終えて



去る7月31日、当北陸支部の設立50周年を祝う一連の行事が、メルパルク金沢において開催された。当日は、まず午後3時より、作家・画家・エッセイストなどとして幅広く活躍されている赤瀬川原平氏による講演会で幕を開けた。氏の著書の題名でもある「我輩は施主である」という演題で、「ニラハウス」として有名な氏の自邸の建設に際しての興味深いエピソードの数々が、満席に近い聴衆を魅了した。開催が平日の午後ということもあり、十分聴衆が集まるかどうか懸念されたが、途中から椅子を追加するほどの盛況であった。講演会に引き続き、記念式典と祝賀会が催された。記念式典では、久保支部長の挨拶、来賓各位の祝辞に引き続き、支部活動に対する功労者への感謝状の贈呈が行われた。功労者としては、まず30周年以降の20年間に支部長を務められた方々および事務局長を務められた方々が順次感謝状を受けられ、さらに、本支部の設立以来一貫して事務局を引き受け、有形、無形の多大の貢献を続けてこられた清水建設北陸支店に対して感謝状が贈呈された。そして、山田孝一郎元支部長が功労者を代表して挨拶され、会を締めくくった。引き続き催された祝賀会では、今年度の北陸建築文化賞の表彰が行われた後、功労者の一人でもある川上英男元支部長の乾杯の音頭で祝賀の宴に移った。和気あいあいとした祝賀会では、功労者の方々の支部長時代や事務局長時代の想い出話が、会の雰囲気をさらに盛り上げていた。この他にも、記念事業の一環として、記念誌「日本建築学会北陸支部50年の歩み」がこの日に合わせて刊行された。これは、支部の活動状況(主に30周年以降)や歴代の支部長・事務局長の回想録を含む、85頁におよぶ立派な冊子であり、刊行にあたっては多くの方々のご協力を頂いた。また、当日の諸行事が無事挙げてきたのも本当に多くの方々のご協力のおかげであり、この場を借りて心よりお礼申し上げたい。

金沢工業大学 高山 誠

■日本建築学会北陸支部大会

開催日時：1999年7月30日(金)、31日(土) 支部大会・見学会
会場：富山県民会館
論文原稿提出締切：1999年3月19日

■第14号記事の訂正

「新潟支所だより」「庭園は文化空間」の文章中10行目
誤「新潟らしさ」がギッシリ詰まった固有の空間を継承しない」

↓
正「新潟らしさ」がギッシリ詰まった固有の空間を継承しない」

日本建築学会北陸支部ニュース「AH!」第15号

発行日 1998年12月20日発行
発行 日本建築学会北陸支部広報部
相田 幸一(新潟) 加藤 則子(富山)
長谷川兼一(長野) 後藤 正美(石川)
桜井 康宏(福井) 石川浩一郎(福井)
事務局 室田 文男・瀬口さゆり
〒920 金沢市玉川町15-1、パークサイドビル3F
TEL&FAX 076-220-5566



特集

地方と東京との共生



支部ニュース「AH!」の第15号をお届けいたします。シリーズ「共生」の最終回の今回は、長野支所で活躍される設計者の皆さんを中心に、信州大学での公開討論で「東京と地方との共生」を語っていただきました。福井在住の広報部会長としては、「設計者の自立」について大きな示唆をいただくとともに、北陸支部の地域的広がりの大きさを改めて実感させられました。

さて、この日本建築学会北陸支部広報誌「AH!」は1994年の5月20日に創刊号を発行以来、年間3号の発行を堅持しながら丸5年が経ちました。任期2年の広報部会員が新陳代謝されていく中で部会長のみが残留を続けてまいりましたが、「ここで心機一転も必要」と判断して福井大学の石川先生に部会長をお願いすることにいたしました。この間、「学術情報誌」ではなく「人間情報誌」であることを基本コンセプトとして、5つの支所から出来るだけ多くの皆さんに紙面参加いただくことを心がけ、シリーズの座談会だけでも100名近い皆さんに登場いただきました。その都度、建築や学会といった枠を超えて「人間の生き方」や「地域のあり方」について新鮮な刺激と問題提起をいただき、部会長として多くのことを学ばせていただいたことに心より感謝申し上げ、北陸支部のますますの活性化を期待したいと思います。

(初代広報部会長・桜井康宏)

地方と東京との共生

ー建築活動とフィールドー

今回の座談会では、東京という視点を交えて長野の建築についてお話しをしていただき、建築活動のメインフィールドの違いがどのように建築活動に活かされているかを伺いたいと思います。

お話しいただく方は、東京に設計事務所を持ち、'NHK長野放送局'の設計を担当された'みかんぐみ'の曾我部昌史さんと竹内昌義さん、東京と長野の両方で建築活動を経験されている'日創建材'の有賀良和さん、長野の設計事務所'オリンピック選手村D工区'の設計に携われた'山口設計事務所'の井熊冬季治さん、同じく長野に事務所を持ち'大田区休養村とうぶ'や'信州高山一茶ゆかりの里'などで東京の建築家と仕事をされた'信濃伝統建築研究所'の和田勝さんの5人の方々です。司会は、信州大学の山口満先生です。今回この座談会には信州大学社会開発工学科の学生が参加し、公開座談会としました。

地方と東京は違う!?

山口：東京と長野の違いを感じられている方がいらっしやると思いますがどうでしょうか。

竹内：僕の場合、もともと東京だからかもしれませんが、あまり違いがないのではないかなという気がします。特に新幹線ができて、1時間半で行き来できる距離になりましたし、時間的なことだけではなく、情報などにしてもほとんど東京と変わらないのではないかと思います。ただ、違いがあるとすれば、気候の面で寒いとか、土地の値段がどうだとかという差はあると思いますが、逆に、それは東京にいればできないことが地方に行けばできるという可能性を秘めていることなので、どっちがどうだということはいえないのではという気がします。

井熊：確かに違いはないと思うんですね。ただ、学生さんにしても、設計事務所に勤めている人にしても、建築に対して意識している人が東京の方が多いと思います。単純に、東京と長野は違うんだというのではなくて、設計者自身の考え方が建築には最も影響し易いのではないかと思います。また、今井ニュータウンの設計の際に、東京の富永謙先生と一緒に仕事をすることができましたが、長野に住んでいればこういう大胆な収まりはできないなと感じました。

和田：東京と長野との違いは、先ほど竹内さんがおっ



座談風景

しゃった通り、時間的な問題は新幹線ができたお陰でクリアできたと思います。私は長野県内で主に仕事をしておりますが、県内を移動するよりは東京へ行く方が近い場合が多く、距離に関しては東京も長野も全く問題ない。また、井熊さんの話にもありましたが、東京と長野のデザイン的な問題に関しては、やはり、東京の建物のデザインは我々にはできないようなすばらしいものがありますし、奇抜なデザインがあります。しかし、我々が設計をする場合には、この収まりで大丈夫なのかとか、寒冷地特有の雪の問題はどうなのかとか、結露はどうなのかという問題に対して意識します。その中で、大胆なデザインでやっていくにはその場所場所によって、地域の状況を判断した中で考えていくことが必要だと考えます。

竹内：確かにそうなんですね。長野に来て、冬に車を止めておいた時に窓ガラスが凍ってしまうとかですね、東京の生活からは考えられないことがいっぱい起こる訳です。それに対する対応は当然しなければならぬし、大事だと思います。

曾我部：少なくとも、長野は地方で東京は地方でない、という考え方自体がおかしいと思います。だから、長野は寒いから特殊だという考え方を止めて、長野という土地は寒いのが特徴であると考えべきであり、逆にいうと、長野の習慣で東京で建物を設計すると、逆の問題が出てくると言うのです。

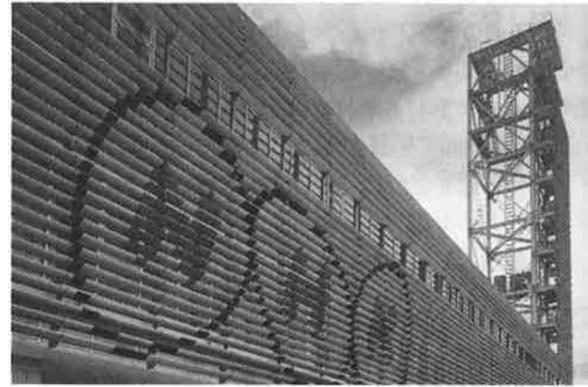
東京の建築家は無茶をする!?

有賀：ずっと東京と各地方を見てきましたが、長野と東京を見てみると、やはり東京の方が斬新で、イメージ的に無茶をするなという感じがします。建築基準法のぎりぎりをねらっているなと思います。イメージをとるのか安全をとるのかということがあると思います。イメージを重視するかどうかでその狭間に挟まれたときが難しく、あまり行き過ぎてはいけないう、イメージ

も大事だと感じます。

山口：そもそも、違いがあるかなと考えることが東京と地方という構図に入ってしまうのです。ただ、東京の人は無茶をするということは、この構図を越えていると想いますが。

有賀：NHKのルーバーは無茶かなと思ったのですが、あのルーバーに対しては何かイメージがあったのですか。あれがあの建物の一番インパクトがある部分だと



NHK長野放送局ルーバー

思うのですが。

曾我部：あれはですね、コンペの段階で、既にあそこに大きいファサードでわかりやすいシェイプを出すんだ、とうたっていたこともあって、あれは必ず実行したかったしなければならなかった訳です。

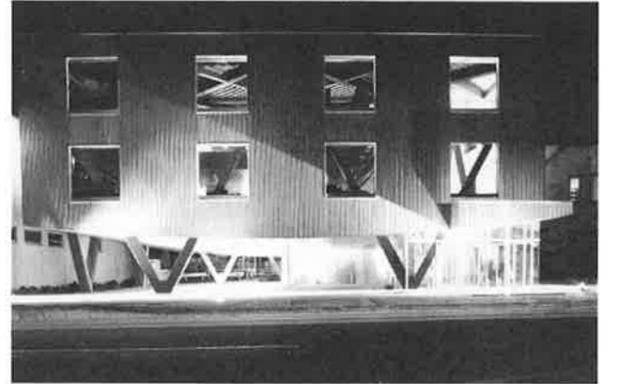
山口：あのルーバーを見ると、やはり、無茶だなと思いますが、雪が積もって巨大なつららが発生してしまうのではないかと不安がよぎる。そういう心配に対して、ああいう大胆なことができるという印象があると思います。

竹内：つららに関しては、僕らが一番考えられなかった部分です。結局、ルーバーにはつららはできなかった訳ですけれども、ルーバーに関しては、相当に慎重にことを進めてきました。実際にどの位の抵抗値になるかを検証するために、風洞実験を行っていますし、その際には音が出ないかどうかの検討もしました。派手なことをやるためには慎重な作業が必要だなと実感しました。

山口：地方の人はいつも安全なことしかやらない、みたいな見方を'みかんぐみ'さんはされますか。

竹内：いや、決してそうではないと思います。山口先生の'Y. Studio'の話をしていただければと思います。あの作品はかなり、きわどいところをがらばっているなという印象を受けるのですが。

山口：あの作品に関しては、無茶をするというよりは、やるからにはおもしろいことをやろうという気持ちがあります。自分の原動力、自分を引っ張るというものは必



Y. Studio

要かなという気がします。そういう意味で、長野の建築というときに、それは僕たちがまだ若いからおもしろさを知らないだけなのかもしれないし、和田さんや井熊さんは非常に高度なことを知ってらっしゃいますが、技術の中での難しい部分はありますか。

井熊：逆にいうと、やってみたいという気持ちは十分あるのですが、それができないというところに力不足というか、もどかしさはありますね。

建築の地方性と建築家のエネルギー

和田：私の場合は木造の建築が主流ですが、自然の節理を考えたときに、やはりその地域にあった建築というのはあると思いますし、気候風土にあった材料なり、工法、デザインといったものがある程度あると思います。

竹内：逆に、僕は今まであったものとか、その気候でばっちりあったというのではない感じを僕はもっていて、それに建物を合わせて行きたいという風に考えると、やはり、気候風土に合っているものというよりは少しづつ変えて行きたいというものがあると思うのですよ。これが、突拍子のないものにつながるのかもしれない。



座談風景

曾我部：僕は地域の特性がやはりあると思います。僕が、その場所に行くとする自分が感じられるリアリティーとその地域の条件というものを同時に実現させる方向を見つけないと。欲張りといいますが、発明みたいなものですかね。僕が設計して楽しいのは、さまざまな条件の中である線が見えてきた時に自分のリアリティーを被せていって、こういうことができたという、なんか発明できたような瞬間があって、建築は楽しいと感じます。

和田：みかんぐみさんにお聞きしたいのですが、気候風土を含めた環境に対しては計画に入る段階で、相当に地元の調査に時間をかける訳ですか。

曾我部：時間をかける方だと思います。コンペに取りかかる前に必ず敷地を見に行きます。後は、気象庁に行ってその地域の気象データを入手して地域の傾向を把握します。

山口：'みかんぐみ'さんの場合は、ある条件のもとでぎりぎりをねらって発明みたいところを楽しむというエネルギーや綿密な調査を行うエネルギーが伺えます。それに対して、そのエネルギーに押されてしまった地元という構図が見えてきます。ただ、東京の現場も長野の現場も同じ面白さがあり、地方に行けば非常に技術が発達していて寡黙な部分の面白さがあり、一方で東京には発言力、表現力の豊かな人がいて、と考えるのは一方的な決めつけですかね。

曾我部：我々は特殊に見えることを目指すのではなく、もっとそこにある条件なり環境なりってものをいかに組み上げていって、新しい状態に組み上げ直すかというところに興味があって、その時にぎりぎりを狙うんですよ。そりゃ余裕があって良くない方向に行くのはつまらないですから、一番いい状態にしたいんでいろんな意味でぎりぎりを狙っていく。そこには奇抜さを求めているのではなくて、ぎりぎりを求めてあきらめないということじゃないかなと思うんですけど。

山口：そうすると和田さんの作品みたいに古い建物だっ

てかなり太い建物を大胆に組んで縄でぎゅっと結んで建ててしまう、というそういう大胆さが見えて、あれだって多分、これでホントに雪に耐えられるのかなって、最初はぎりぎりのところを狙ってやっていたのが、非常にわかりやすく丈夫であってというのが、現実に残ってきていると思います。そうすると狙っているところというか喜びというのは同じところの話じゃないでしょうか。

和田：そうですね、茅葺きの建物というのは単純ですから、三角のトラスを叉首といいますが、その大空間を叉首だけで持たせているんですよ。昨年重要文化財になりました美麻村の中村家住宅なんかは300年です、茅葺きで。300年茅葺きだけであの豪雪地域の中で耐えているんです。やはりその空間の構成には奇抜さはもちろんあると思いますね。お寺やお宮でもそうですけど、結構大胆な計画はしていますね。

「共生」への足がかり

和田：長野とか東京とかいう考え方だけでなく、インターネットやファックス、交通高速網の発達など、昔とはだいぶ感じが変わってきた訳ですから、もう地方とか東京とかいう考え方はないと思いますね。私は長野にいますが東京の設計者や先生方とも、いろいろコミュニケーションをとっています。実際電車を使用すれば、塩尻から東京でも日帰りできますし、本当に東京と長野は近くなったと実感しますね。

竹内：長野にいるから断絶されているんですけどっていついってしまうところが問題だと思いますね。

山口：どんどん出ていくってことですかね。

竹内：出ていくっていうか、出たり入ったりすることだと思いますね。

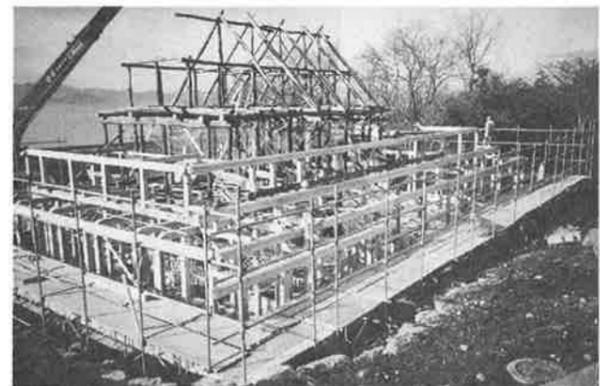
和田：だから、非常に近くなったと思うんですね。

山口：そこに壁をイメージしてはいけないんですね。

竹内：自分で壁を作ってるような感じがあるんじゃないかみたいになっていう気が、今ちょっとしました。

山口：私もそうだったんですが、憧れの地、東京っていうイメージがあって、実際に東京にいてみて、建物をみれば、そういうことではなくて、いろんな人と話ができることが良くて、自分で壁を作ることが、互いのコミュニケーションを拒絶するわけですからそういうことはしてはいけないことが良くわかりました。また、ぎりぎりの線を狙うということは基本的な姿勢として何かありそうですね。どうもありがとうございます。

-1998年11月25日、信州大学工学部内にて収録



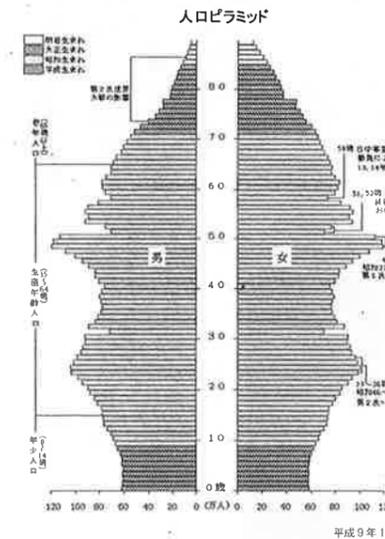
大田区民休養村とうぶ移築民家

!!!ピラミッド!!!

20世紀の人口「ピラミッド」の形はどのように変化していくのでしょうか？現在のピラミッドを徐々に下にずらして見れば大体の予測がつかないと想いますが。さてお聞きします、「この文章を読んで下さっているあなた、あなたはいったいおいくつですか？また、あなたのご両親や親戚の方々はおいくつでしょうか？あなたの町には小学生以下のお子さんが何人おられますか？昨年のお雪の時、雪かきはどなたがされましたか？」と、まあ色々とお聞きしましたが、我々の20世紀前半の人口ピラミッドは、実は今お聞きした答えが全てではないのでしょうか？現在高齢化が進む中、時代は高度成長から低成長あるいはマイナス成長へと変化を続けています。そんな中でより深刻な問題は少子化ではないでしょうか。そして、その反動を受けるのは、実は、今働き盛りの40代から50代なのです。厚生省ではなく、建設省の制度である「高齢者向け優良賃貸住宅制度」は、いわば少子社会の先を想定した世の中の建設業界に対する提言であると想います。

「バブルが弾けたのはあたりまえだったのだ。」とどなたかがいいましたが、同じように「高齢社会」や「少子社会」が訪れることはもう既に既成事実である。いや、もう既に訪れているのです。建設業界はその

「あたり前な事実」の前で今何を社会に対してすべきかを真剣に模索し、実行しなければなりません。高齢社会で、いやいや我々がその時、いかに住みやすい住宅を、そしていかに住みやすい社会があれば良いかを！！



-(株)ヤマウラ 桜井 豊

開港五都市景観会議



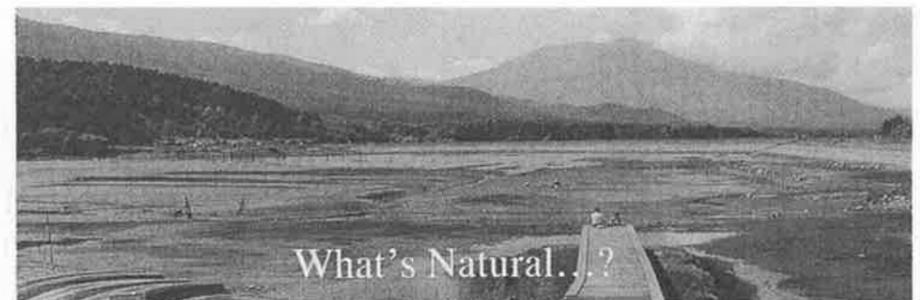
開港という共通の歴史を切り口に、神戸市の呼びかけで始まった開港五都市景観会議が、各都市持ち回りで一巡し、二巡目最初の開催都市神戸市が震災の傷まだ癒えずということで一年延期となりましたが、会議の成否はともかく、この5年間都市景観への急速な関心の昂まりは目を見張るものがあります。声高に叫ぶと言ったものではありませんが心から滲みでてくるような渴望に近いものかも知れません。この会議は各都市民間団体及び個人が手作りで主催するものですが、行政も積極的にパートナーになろうとしているのも、社会構成の一員として当然とは言いがたうらしいことです。

最初は各都市ともどちらかと言うと歴史的遺産とかお国自慢的な発表や議論の多い会議になりがちでしたが、手の内をさらけだして二巡目を迎えると、つぎはなにをお見せしようかとはた困ります。各都市には熱い思いで長年景観形成に汗を流し努力をされている多勢の団体、個人がおられます。遺産として残されているもの、だれもが感嘆する巨大な都市美をアピールする建造物、新しい文化を感じさせ美しく整備された街区や街並みなどは確かにすばらしい景観を形成していますが、管理を怠ったり、それを超えるものができたら途端に色あせた景観になりはしないか気になります。

各都市の景観形成団体がその熱き思いで景観を語り、景観形成に情熱を燃やすのは、物凄い早さで変貌している文明文化に人の心や営みがともすると置き去りにされているむなしさのためかも知れません。景観づくりを目指しながら進展する街づくりが駅舎から街区まで次第にどの街もどの都市も同じように見えてしまうのは悲しい気がします。季節の移ろいや風土が人の心や営みを育んだ景観を期待したいものです。

開港五都市景観会議が平成11年度開催都市神戸市で二巡目が始まります。熱い思いで語り合えるその日を楽しみにしています。

一新潟市景観形成市民団体連絡協議会会長 栗間 道夫



(信州大学・黒柳 博美)

めでたさのてんご盛り



鏝絵あるいは漆喰彫刻とよばれる左官職人の技術がある。漆喰の壁に鏝で浮き彫りに風景や肖像などを描き出し、その上に色漆喰を重ね、

あるいは彩色を施したもので「伊豆の長八」に始まったといわれている。

富山県小杉町三ヶは江戸時代から左官業がさかんな土地で、その中でも明治19年同所に生まれた竹内源造は、天性の絵心と抜群の技能を持ち合わせ、「明治34年にはわずか15歳の若さで、東京の帝国ホテルの貴賓室の漆喰彫刻を仕上げている。」(小杉町史1997)と紹介されている。

この夏に、富山県建築士会まちづくり委員会が、小杉町の旧街道界隈のまちなみや、小杉の十社大神などに飾られている源造の作品を見る「まちなみウォッチング(射水編)」を企画したが、所用により参加できなかった。

日もあたたまった夏の終わりに、源造の作品を見に行こうと思ひ立ち、砺波に向かった。同市宮森新の名越家の土蔵には、漆喰彫刻では日本一といわれる、長さが十間にも及ぶ双龍の鏝絵が残されている。源造の最高傑作といわれ、紹介される機会も多く、テレビ番組「開運!なんでも鑑定団」にも登場し、きわめて高い評価を得ている。

同市頼成の千光寺には、土蔵と観音堂に飾られている奉納額に源造の作品が残されている。土蔵の戸前には、姿のよい夫婦鶴、亀、大黒、恵比寿などの図柄が描かれ、やや彩色は薄れているが、苔でおおわれた庭の雰囲気にとってもよく似あっている。観音堂の奉納額は、布袋、福祿寿、井戸、朝日、富士山、松、梅など、めでた尽くしのてんご盛り、ほとんど「染太郎・染之助」状態である。その組み合わせは、いささかシュールで、ユーモラスで、そして愛嬌さえ感じさせる。

建築様式の変化により、鏝絵は忘れ去られつつあるものの一つである。

—富山県土木部建築住宅課 滝川 博



郊外に便利なスーパーマーケットができて、街に出かける人がいるのは、着飾った人々を眺める楽しみと、着飾った自分を見られる楽しみが、無意識にあるからではないだろうか。

(金沢工業大学・西田谷知代)

近ごろ思うこと

さて、最近の関心事では、まず景気の低迷、地球の温暖化、環境ホルモンのいわゆる地球環境問題、老人介護の問題などが挙げられます。

特に、地球環境問題ではテレビ・新聞・雑誌などで取り上げられ、少しずつ知識が深まり、深まるほど恐ろしく思われてきます。これは世界最高水準の便利さや快適さを追求してきたツケが回ってきて、さらに汚いもの、危険なものにフタをして、知らん振りをしてきた結果なのではないでしょうか？これでは今の子供たちに明るい未来は来ないような気がします。次の世代に受け継ぐにしても、私たちはこのエネルギーを消費する生活から、現代文明の品々の使用を最低限にし、完全な快適さより多少の不便を味わいつつ暮らすことが大切なのではないでしょうか？つまり、単純に言えば昔の暮らしに戻って、自然に逆らわず共存して生活する必要があると思います。ひとりひとりが何かにこだわって暮らしてほしいものです。

老人介護の問題では、私事ではありますが、母が今年始めから介護が必要となる生活になり、今までの暮らし方が変わりました。特に子育てと違って大人の介護となると難しいものがあります。母を憎まないようにやさしく介護できればいいのですが、「人間は誰しも好きで年を取るのではない、私もいずれは・・・」と思って、家族の協力を得ながら生活しております。また今はバリアフリーが大流行、家中の段差を無くした住宅が登場していますが、我が家では完全介護ではなく機能回復のトレーニングや老化防止に役立てるためにも、ある程度の段差があって、リハビリする生活も必要です。

なんだか、最近では明るい話題もなく世紀末のような時代ですが、もう一度暮らしのあり方を基本から考え直し、家族と共に、時代と共に成長していきたいと思っています。



—松下構造設計事務所 松下 正

「地域環境」の改善を目指して

—福井大学地域環境研究教育センターの紹介—

福井大学に地域環境研究教育センターが設立されて半年が経過しました。このセンターは、平成9年度まで存在した福井大学積雪研究室を拡大発展させたものです。名称からも分かるように、積雪に伴う研究、特に積雪災害防止の研究から一歩も二歩も進んで、地域研究全体を総合的に研究し、地域の維持、保全、改善、創出に貢献する目的で設立されました。

我々を取り巻く環境はあらゆる意味で多様です。規模(スケール)の面から見ただけでも、地球環境規模のものから、家庭環境に至るまであります。地域環境研究教育センターでは、我々が日常行動する範囲内にある環境を研究テーマにしています。すなわち、「地域環境」という言葉には、単なる地域の自然環境という意味以外に、地域の社会環境や生活環境等を含んでいます。本センターには、約30名の研究者が関与し、これらの分野の研究や教育に専心しています。

ある集まりで、「我々が日常いい環境であると感じる対象は何か」と質問したことがあります。回答は世代や生活場所、職業などによって異なりますが、多くの場合、「日常の生活がうまく流れ、快適



な生活が営まれること」と答える人が多くいました。適度の広さの生活しやすい家を持ち、通勤に便利な交通環境にあり、仕事しやすい職場であることを求めているのです。地球環境や地域の自然環境の重要性を理解してはいるが、より身近な生活環境の快適さを求めていることが分かります。この面からは、建築学会との接点があり、本センターにもこれらの分野(都市環境、交通環境、住環境など)を重要視しています。これからは、建築学の分野の方々と協力することにより、目に見えた形での環境改善が進むものと期待しております。

—福井大学地域環境研究教育センター長 服部 勇



就職して仕事をするようになり、晩酌をするのが一人前との決め付けから、毎晩ビールで晩酌をするようになりましたが、日本酒は、会合の時さえほとんど飲まず、もっぱら

ビールという状態でした。

北陸・富山には昭和53年4月に来ました。それまでは名古屋が勤務地で、酒に関しては全くの無知といって良いほど縁がありませんでした。富山に来た当初もやはりビール党で、日本酒はあまり飲みませんでした。鉄筋コンクリートの団地の生活1年半、1度部屋に入れば暖かく、翌朝まで外に出ることもなく、ビールとか、洋酒とかで晩酌をして過ごしていました。

『富山の冬は雪があり、日本酒が合う地方です。』

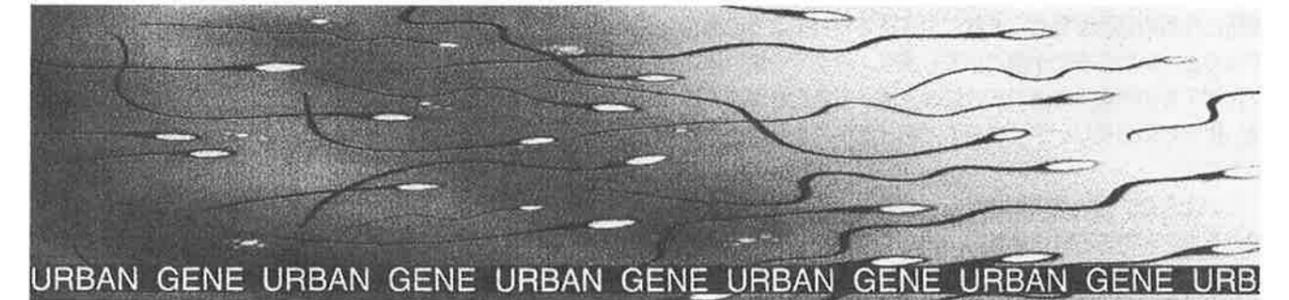
こう感じたのは、富山市内に54年に家を建て、56年豪雪を過ごしたときでした。雪の降る日に、暖かい日本酒を雪見障子を開け、雪を眺めながら飲む酒、寒さ・疲れを忘れさせてくれるような気がしました。ビールでは雪見がもったいないような気がしています。以後、日本酒を嗜むことが多くなり、現在に至っています。

ただ、晩酌も癖のもので、現在は会合時だけ(家族・町内の集まり)で酒を嗜むことが多くなっています。冬の燗酒も暖まりますが、最近では、夏・冬を通して冷や酒が多くなりました。おいしい冷酒が多く販売されていますが、どんなお酒も冷やで充分おいしく飲めるものですね。

最後になりましたが、お酒の味もわからないのに、おいしいお酒の推薦もないでしょうが、(北陸の酒でなくごめんさい)灘の菊正ビン詰め樽酒がおいしいお酒(飲みやすいかな)と思っています。飲むときの木の香りがたまらなくおいしさを醸し出すように思われます。富山市内のコンビニに置いてあったのですが、最近、その店も置かなくなり買えなくなりました。酒屋さんをお願いして取り寄せてもらえばよいのですが、時々飲む程度ではそんな無理も言えません。

もし、このお酒を見つけれたら一度ご賞味してみてください。

—富山職業能力開発短期大学校 岡本 俊二



(福井大学・野坂 和展)